

徳とく泉いずみ寺てら報ほう

No.0031

発行
令和2年5月
発行元 徳 泉 寺
仙台市宮城野区
榴岡 3-10-3
(022)297-4248

前任職 法話

「ぐち」

穏やかで和やかな、人もうらやむような家庭に見えても、人知れない不満はあるようです。そして、その不満はいつか「ぐち」になつてどこかで吐き出されることとなります。溜まりに溜まった不満を一気に吐き出して聞いてもらおうと、そして慰めの言葉の一つもかけてもらおうと、なぜか気持ちりが軽くなつたような気がするのですが、それでも現実はいまも変わらず、その不満な家庭は同じ状態のままあるわけです。また一途に我慢の生活に戻らなければなりません。外から見ると明るく見える家庭で、暗い生活を繰り返さなければならぬことになりません。

「ぐち」とは漢字で「愚痴」と書きますが、「痴」は「疒（やまいだれ）」に「知」で知識・知恵が病気になるって、物を正しく見ることができない状態を言うのだそうです。

私たちは、「苦」は私の外から来るものと思ひ、外にばつかり目を向けて「あれさえないかったら」とか、「あの人がこうだったら」と、他人、他のものの変化・変革によって自分の「苦」を除こうとしますが、そこに問題があるのだと、苦しんでいるこの「私」に視点をおいて、目を「私」

の内へ向けていくのがお釈迦様の仏教です。「苦」から逃げ、「苦」の責任を他に転嫁していたその事実を目を開くとき、「苦」の事実があるがままに引き受けていくことができるようになることも、しかもその「苦」を生かしていくことができる、そういう道が開かれてくるのです。「痴」はまた「癡」とも書きますが、これは疑う心が病気になるって、人のあり方ばかり疑つてしまい、私自身のあり方については何の疑問も持たないということを表わしているように思えるのですが、いかがでしょうか。



新型コロナウイルス感染予防のため非常事態宣言が出され、多くの方が三ヶ月以上も外出を控え、人との交流を避けた生活を余儀なくされました。感染症の恐ろしさは言うまでもありませんが、今まで私たちが大切だとしてきたお付き合いや楽しみなどもその大半を見直さなければならぬとなりました。

世界全体の大きな時代の変化の中で不安は大きく自分を包み、先を見通せない情勢に心細く感じることもたくさんあるでしょう。そんな時、外ばかり見る自分の考え方のクセに気づいたら、「私自身がよく見えるのかもしれない」そんな時だからこそ「生き生きと生ききりたい」と願っている私の命の声を傾けることができるのかもしれない。